

現代中国の舞台芸術における「長征」イメージと その政治的背景

The Image of the “Long March” and Its Political Background as
Presented in Modern Chinese Theatrical Art

鏡屋 一

(Hajime ABUMIYA)

Abstract :

The drama “Wanshui-Qianshan (Thousand Water and Many Mountains),” with the “Long March” as its subject, was created in the 1950s. This drama became popular, and therefore, it was filmed as a commemorative movie for the celebration of the tenth anniversary of new China in 1959. The political background of this drama involved the ideology of the Chinese Communist Party that promoted an Anti-Right Campaign.

The revision of this drama was carried out in the mid-1970s. Mao Zedong and other leaders supported this revision, but it was delayed by the interference of the Cultural Revolution group. The group was concerned that the revised drama would reveal the intra-party struggle between the two political factions and have a negative impact on the left, which included Jiang Qing, who was afraid that this drama would encourage the executive officers who were reinstated in their former positions after the Lin Piao case.

キーワード：長征、万水千山、話劇、映画、紅軍

Keywords : Long March, Wanshui-Qianshan, drama, movie, Red Army

はじめに

中華人民共和国憲法が發布され、毛沢東が国家主席に就任した1954年、話劇「万水千山」が『劇本』誌上に発表された。長征をテーマにした新中国最初の6幕7場の劇で、作者は軍人作家の陳其通である。話劇とは台詞が中心の現代劇のことで、京劇のように歌を中心とする伝統劇とは区別される。「万水千山」の標題は、毛沢東が長征を題材に詠んだ詞の一句「万水千山只等閑」に由来する。長征は、多くの急流（万水）や峻険な高山（千山）を踏破し自然の脅威に打ち勝った中国工農紅軍（紅軍と略称）の1934年から1935年の大移動作戦であり、中国共産党

（中共、党と略称）の歴史を構成する重要な環節である。

話劇「万水千山」は大いに人気を博し、1955年の1年間で全国数十の劇団が700回公演したとされる⁽¹⁾。翌1956年3月、党中央文化部が第1回全国演劇試演コンクール（全国話劇観摩演出）を北京で開催した。「万水千山」は、創作賞、演出賞、監督賞、俳優賞、舞台設計賞などで一等賞を獲得し、各賞を総賞めにした⁽²⁾。この受賞は、大会評奨委員会の評定にもとづき、各地の文化主管部門と劇団の意見を総合した結果であり、それぞれについて獎金と賞状が授与された⁽³⁾。

「万水千山」は話劇の成功を踏まえて映画化され、中華人民共和国建国10周年を祝う記念映画として1959年に公開された。演劇同様、新中国最初の長征を描いた映画であったことから好評であった。長征に関しては当時多くの「老紅軍」が評論や回憶の記事を書いたこともあり（1957年の『星火燎原』叢書全8巻等）、一時、全国には「万水千山」ブームが現われた。

本稿の目的は、長征を描く演劇と映画の内容分析と政治的背景の考察を通して、それらが描く「長征」イメージが、現在の中国共産党の政治的な正統性根拠となる「歴史」意識の源泉となっていることについて検討することにある⁽⁴⁾。

I. 長征話劇「万水千山」の誕生とその特徴

「万水千山」の作者陳其通（1916年-2001年）は、四川省出身の軍人劇作家である。1932年に紅軍兵士となり、17歳で長征に参加、四川から陝西までの行程を走破している。当時は年少で任務の範囲も狭く、長征の意義について十分に理解していたわけではなかったが、長征の幾つかの画期となる第1方面軍と第4方面軍の合流、第2方面軍と第4方面軍の合流、雪山越え、草原越え、臘子口攻撃は自ら見聞しており、そのさいの多くの感動的な「英雄」たちの逸話を覚えている、と陳其通は述べる。「あの愛すべき戦友たちは、不撓不屈にも闘争の最前線に立ち、闘争の中で成長した。多くは現在もしっかりと生きていて、祖国の社会主義建設のために努力奮闘している。だが多くの戦友たちは戦場で勇敢にも犠牲になった。生きているものも死んだものも、苦しい闘争の歲月、党と毛主席の指導で、驚くべき力、卓越した智慧、何も恐れない精神を発揮した。これらは称賛すべきものである」と陳其通は回想し、話劇制作の動機を語っている⁽⁵⁾。

長征の「英雄」たちの物語を書く準備は早くからなされた。1937年から38年の間にルポ風のシナリオと通信記事を習作として数本書き、1938年秋から「艱苦路程兩万里」という3幕の話劇を書き始め翌年秋に初稿が出来たが、そのまま10年の時間が経った⁽⁶⁾。

1948年、陳其通は遼寧南部で病氣療養中に再

度書き始め、同年冬「二万五千里長征記」の初稿が完成したが満足な出来栄ではなく、1949年春、更に修正を行い、劇名を「鉄流兩万五千里」と改めた。全劇は上下2部に分け、第1部は彝族地区から臘子口まで、第2部は1方面軍と陝北紅軍との合流から八路軍に改編されるまでとした。東北局宣伝部と東北軍区政治部の支援を得て討論会を持ち、その貴重な意見に基づいて書き直し、第1部を土台に4幕劇を書いた。彝族地区通過、大渡河の強行渡河、草原越え、臘子口攻撃の4幕である。それは同年夏に東北軍区文芸工作団（文工団と略称）によって上演され、更なる批判と意見を得て修正を行い、1950年には解放軍のいくつかの文工団が、華北、東北、華東など各地方でこの劇を上演した⁽⁷⁾。

1953年7月、解放軍総政治部文化部が討論会を開催し、陳其通に再度修正を求め、名前を「万水千山」とした⁽⁸⁾。そして何度かの修正を経て、1954年11月に6幕劇「万水千山」の脚本が発表された。把握している限りでは、活字になった「万水千山」には、1954年版、1955年版、そして1957年版がある。それぞれ、①陳其通「萬水千山」『劇本』1954年11期、②陳其通『萬水千山（六幕劇）』（人民文学出版社、1955年2月）、③陳其通「万水千山（六幕話劇）1957年版本」『陳其通作品選』（解放軍文芸出版社、2008年7月）である。①と②はほぼ同じとみてよいが、③は数多くの小さな修正が施されている。

「万水千山」は、紅軍第1方面軍の先鋒部隊である第1營（大隊）について描いており、各々独立した6幕からなる。内容については、「【表1】6幕劇「万水千山」（1955年）の概要」を参照。「万水千山」は、「婁山関攻撃」、「彝族との結盟」、「大渡河の強行渡河」、「毛児蓋」、「草原越え」、「天險臘子口の突破」という6部分から構成されている。当時は長征回想録である『二万五千里』や『紅軍長征記』がすでに刊行されており、それらが長征話劇の分節化に影響を与えていると見るべきである⁽⁹⁾。

歴史の事実としては、婁山関攻撃や臘子口攻撃、彝族地区通過の前衛部隊も第1營ではな

【表1】 6幕劇「万水千山」(1955)の概要

幕/場	時間	場所	概要
第1幕	1935年2月中旬、月の夜。	貴州省、遵義市から遠くない婁山関の山の麓。沈家祠堂の後院。婁山関民団大隊部。	紅軍が村を再占領し村人を解放する。地主を逮捕し裁判にかける。郷政府を樹立し農会主任を政府主席に選出する。鶏、野菜、酒などで村人の慰問を受ける。
第2幕	1935年5月	西南川康辺境の彝族区 の古寨——桃花寨	彝族居住地を通過する際の混乱。劉伯承(参謀長)と小葉丹(彝族の首領)が談判中。羅順成が彝族を敵とみて攻撃しようとするが、党の民族政策に背くとして、趙志方に批判される。
第3幕	1935年5月16日午後	大渡河岸——安順場	趙志方の作戦指揮で、水練の村人を徴用、老船夫の船を修理、材料を集めて筏を作成。水流を見ながら攻撃地点を確認。突撃隊を組織し夜間の奇襲を実行する。李有国が負傷する。
第4幕	1935年7月初、ある晴れた朝。	毛児蓋、大喇嘛寺のそばのある蔵民の村	紅軍は雪山越えに出発する準備をしている。蔵族の人びとは李有国教導員を療養のため置いてゆくように言う。団長らは連れてゆくことにする。蔵族の首領が馬を贈る。紅軍は『三大規律八項注意』を唱い進軍する。
第5幕	1935年8月15日午後	草地	疲労と飢餓と病気で戦士が倒れてゆく。李有国の病状も悪化する。部隊は食糧を優先して与えようとするが、李有国はそれを受けつけない。敵の騎兵隊を奇襲する。李有国が死ぬ。
第6幕 第1場	1935年9月初旬夜	敵軍司令部の作戦室	敵軍長らの会話。蔣委員長からの電報(出動命令)に右往左往する。敵の目を借りて紅軍の優秀さを明らかにする。
第6幕 第2場	1935年9月初の夜	甘肅省隴西岷県内の臘子口	紅軍は臘子口を守備する敵大隊本部を占拠する。羅副営長の立案で臘子口を攻撃開始。黄軍長が将来計画を伝える。
尾声	前場の続き	臘子口の山頂、絶え間ない銃声の後、部隊が峰峰から突撃する。	紅軍が戦闘の勝利を喜んでいる。大勢が登場する。大隊が着いた、毛主席が来ると黄団長が叫ぶ。全員が「毛主席万歳、共産党万歳、中国工農紅軍万歳」と叫び、幕が下りる。

く、第1営は毛児蓋に1ヵ月半も滞在しなかった。話劇の設定としては、それらのある営の事件として集中する必要があった、と陳其通は述べる。そして長征の意義を芸術作品として表現するためには、「局部の歴史の真実性一個別の真実性」を打ち破り、当時の一般的な真実を重点的に描かねばならなかった。その可能性を発揮するには、あるひとつの営の何人かの幹部の身に事件を集中させるしかなかった」と陳其通は言う⁽¹⁰⁾。

こうして生み出された典型的な人物が、李教導員(27,8歳)、趙営長(21,2歳)、羅副営長(31,2歳)、黄団長(27,8歳)、宣伝隊員李鳳蓮(18,9歳)である。この劇では「努力して政治工作員(劇中では李教導員)を事件の中に置いて書くようにした」と陳其通は言う。「李教導員のような人物は、私は何人、あるいは何十人、何百人と見たことがある。この人物は、私の多くの戦友たちの事実を集中して書いたものである」と⁽¹¹⁾。

話劇「万水千山」は、1954年のある調査によれば、解放軍総政治部文工団によって北京で102回上演され、9万人余りが観劇した⁽¹²⁾。ある地方の党委書記が「万水千山」を見た後、たいへん教育的意義があると考え、すぐに労働組合の全職工にこの劇を見にくるよう命令したという⁽¹³⁾。

観衆たちの多くが最も深く印象付けられているのも李有国という政治工作幹部である。当時のある論評はその特徴を次のように集約している。『万水千山』は正面から英雄の人物を描いているおり、絶望的な状況下で、同志、共産党、毛主席、革命事業を熱愛し、革命の勝利を信じ、楽観的な精神で勇気を出して前進する⁽¹⁴⁾、と。「万水千山」の成功は、このような英雄像の創造に成功したことに負っていると考えられる。

II. 長征映画「万水千山」の登場と意義

1959年に中華人民共和国建国10周年を迎えるにあたり、政府および党中央は、映画制作を

10周年記念事業の重点項目に組み込み、思想面でも芸術面でも世界の先進水準に追いついた映画を少なくとも7部を制作することとした。1958年11月初、国務院文化部は北京で各電影制片廠廠長会議を開催し、記念映画制作のための具体的な計画を策定した。会議の席上、周揚（文化部副部長）が、記念映画は「内容が良く、風格が良く、評判が良い」の「三好」であるべきと発言した⁽¹⁵⁾。

その決定を承けた解放軍総政治部と八一電影制片廠の指導者は、10周年記念のために話劇

「万水千山」の映画化を決めた。成蔭と華純が監督を担当し、シナリオ改編は孫謙と成蔭が担当した。映画「万水千山」も中華人民共和国になってから撮影された最初の長征映画となった。主要な役者は話劇と同様、教導員の李有国役が藍馬、営長の趙志芳役が黄凱、副営長の羅順成役が梁玉儒、李鳳蓮役が李萌、小周役が白爾純である。

映画版の物語の構成もほぼ話劇のそれを踏襲しているが、構成上の大きな変更点として、彝族地域での民族融和の場面は削除され、より劇

【表2】映画「万水千山」（1959年）の概要

順序	場面と主題	概要
1	安順場の渡河、盧定橋奪取	民間人の水夫の操船する船に乗った兵士たちが銃撃戦の末、大渡河を渡る。続いて悪天候を突いて飲まず喰わずの夜行軍で鉄索橋のある瀘定まで120キロを移動。突撃隊を編成し犠牲者を出しながら敵守備隊を殲滅する。銃撃戦で教導員李有国が負傷する。
2	雪山山麓へ移動	雪山越えの準備中多くの隊員が李有国を気遣う。炊事兵が貴重な茅台酒を、黄団長は自分の軍用コートを李に贈る。羅副営長が李のために兎を狩ってくる。同志たち、兄妹、許嫁、親子が互いをいたわっている。
3	雪山越え	雪山を黙々と行軍する隊列が続く。士官たちは疲労の激しい隊員を励ます。突風で兵士が落下する。老周が墜落し息子が悲鳴をあげる。李有国が皆を激励する。ようやく峠を越え、隊員たちが軽快にすべり降りてゆく。道案内の村人が自分も革命をやると着いてくる。
4	藏族地区の紅軍と民衆	藏族地域に到着。民族融和策が成功し、藏族の歓迎を受ける。藏族の少女が紅軍の少年兵に、紅軍は国民党の軍隊とは違い貧民を救済する軍隊だと言う。少年兵は北上して抗日救国をやるんだと誇らしげに答える。遠い抗日ではなく眼前の敵を撃つべしと説く王連長に羅副営長が思想の誤りを指摘し説得する。李有国の傷は悪化し高熱を出し倒れてしまう。藏族首長が李を残すように紅軍に提案するが、李は無理をして出発する。李を慕う隊員たちが担架で担ごうとするが、戦士たちは革命の財産だと断り、無理に快活にふるまう。
5	草原の湿地帯越え	「三大紀律八項注意」の旋律を伴奏に草原を進軍する。水を飲もうとする兵士に上官が毒だから飲むなと言う。夜、宿営の火を囲み兵士たちが多様な出身地を語る。雨中で睡眠する。李有国が兵士を励ます。朝、湿地帯を歩く。衰弱した兵士が倒れるのを見て李有国は重荷を馬に乗せてやる。夜、李有国が自分たちの行軍の詞を詠み、その諧謔に皆が喜ぶ。李鳳蓮ら宣伝隊が寸劇をやる。李有国が趙営長と死傷者の数を確認して嘆息する。痛みをこらえた李が傷病兵の見舞いに行き、紅軍の将来について話す。李が「インターナショナル」を歌い始めると、傷病兵が次々に身を起こして唱和し、草原中に歌声が広がる。
6	草原での食糧難と戦闘	湿地帯で李有国の乗馬が死ぬ。必要なのは涙でなく強さだと李が当番兵を慰める。李の衰弱を心配する趙らが担架を持って来る。李は固辞し他の兵士を大切にしよう説得する。李は明るく振舞い他の兵士を励ましながら歩く。食糧が欠乏して落胆している小周に、食糧がなければ雑草を採り革ベルトを煮て食べられると励ます。総部長が自分の馬を殺して馬肉を李に食べさせようと届けてきて李を感動させる。朝、敵の騎兵との戦闘が始まる。李有国が起き上がり、馬を生け捕りにして、党中央に送ろう、革命を馬に乗って行かせろと叫ぶ。奇襲が成功し、多数の馬を拿捕する。団長と政治委員が戦士の闘志を称賛する。李有国が人知れず死んでいるのに気がつく。部隊は李を用い悲しみに包まれる。あなたの理想は我々が引き継ぐ、と黄団長が甲辞を述べる。
7	臘子口の戦闘	自然の要衝と敵軍守備隊の攻撃で犠牲が出る。国民党軍の陣営では紅軍の出現に騒然となっている。趙営長が山越えして背後から敵陣を奇襲し渡河に成功、岷城を占領する。藏族の民衆と兵士が喜んでいる。字幕：1935年10月陝北へ到達し長征が終わる。

的な盧定橋の鉄索橋奪取の場面が追加されている。そのほかに、話劇版にはない小さなカットが多数追加されている。映画版の物語の内容については「【表2】映画「万水千山」(1959年)の概要」を参照。

映画版は音響効果、モンタージュやクローズアップ等の映像技法の効果から、話劇以上に登場人物の造形が明確になっている。被弾して鉄索にしがみついても落下する兵士。北風、雪崩、暴風に飛ばされる兵士。雪中行軍の兵士のボロを巻いた足。大湿原で雨に打たれながら横たわる兵士。沼に吸い込まれ溺死する馬。台詞のないそのような画面が、巧みな心象風景の描写となっている。長征の高度な芸術的総括、英雄的人物像の創造、紅軍の軍事的勝利、兵士たちの団結と友情、強靱な革命的意志と困難を恐れない革命的楽観主義の精神、軍民一致の建軍原則など、人民の軍隊の本質が集約的に盛り込まれている点が評価された。

特に李有国の造形は、長征中の紅軍の幹部兵士の心理と徳性を典型化しているとして、この映画に関するある分析では(1)勇敢に戦う英雄的気概、(2)大自然との闘争を恐れない精神、(3)同志への愛、(4)身をもって則を示す、自己に厳しい優秀な品徳、を挙げ、ここに長征中の紅軍戦士の最も本質的なものが凝集しており、強烈な芸術的感染力を生み出している、と説く⁽¹⁶⁾。また、ある評者は、映画に見る李有国という人物像は、作者陳其通が紅軍の政治工作担当幹部に対して抱く理想像が寄託されたものだ、と称賛している⁽¹⁷⁾。

Ⅲ. 陳其通の「百花斉放、百家争鳴」批判

1957年1月7日『人民日報』紙上に、解放軍総政治部文化部の陳其通、陳亜丁、馬寒冰、魯勤が連名で「我們対目前文芸工作的几点意見[現在の文芸工作に関する我々のいくつかの意見]」を發表した。

陳其通等は、1956年に党中央が提起した「百花斉放、百家争鳴」の方針(双百方針と略記)は新たな繁榮をもたらしたが、去年を振り返り満足できない状況があるとして以下の3点を挙げた⁽¹⁸⁾。

①工農兵のために奉仕する文芸と社会主義リアリズムが減少した。「党の『百花斉放、百家争鳴』の方針の下、異なった芸術思想と創作方法の存在が許されている」が、そのため「工農兵のため」や「社会主義」を否定する意見が現れている。したがって「社会主義文学芸術の隊伍」が消滅しないように「工農兵のために奉仕する文芸の方向と社会主義リアリズムの創作方法を堅持し宣伝しなければならない」。

②文芸工作者に思想の硬直化と芸術の衰退をもたらさぬよう「公式化、概念化」への反対が勢いを得ているのはよい。しかし「家事、恋愛、冒険の物語」が、人民を教育し人心を鼓舞する「社会変革」「解放闘争」「英雄的人物」を描く作品に取って代わってしまった。こうして「文学芸術の戦闘性」は衰弱し「社会主義建設の光輝」は失われる。

③双百方針以来、多くの人が古いものの改編に熱心になっている。しかし「民族芸術の基礎の上に、新しい社会主義芸術の花を創造することが、我々の第一の任務でなければならない」。よってそういう花を守らないような『百花斉放』はまったく正常ではない⁽¹⁹⁾。

陳其通等の論文は、表面では双百方針を賞賛しているが、実際はこの方針を批判する意図が含まれている。この論文を読んだ毛沢東の反応は素早く、ただちに楊尚昆(中央書記処候補書記、中央弁公庁主任)に印刷させ、1月18日から27日に北京で開催される全国各省市自治区党委書記會議の資料とさせた。會議初日、毛は講話で陳等4人の論文に触れ、良い花(香花)を咲かせ、毒草は咲かせてはならないというのは双百方針を理解していないと不満を述べた⁽²⁰⁾。

毛沢東は双百方針の拡大を狙っており、陳其通等の論文は「教条主義」の誤りだと考えていた。だが書記たちは毛が陳等を肯定したと理解したため、地方への伝達は混乱した。陳等の意見は正しいと捉えた書記たちの反応に見るように、双百方針に懐疑的な意見が党内にあることを知った毛は、1957年3月12日、党の全国宣傳工作會議で講話の概要を書いたさい、「放(開放)」は百利あって一害なく、「収(収束)」は誤っていると、「各省に4人の文章についての

批判が誤って伝わった問題」を指摘した⁽²¹⁾。

当時、中国作家協会の雑誌『文芸学習』には、党組織の官僚主義を批判する22歳の気鋭、王蒙の作品（「組織部新来的青年人」『人民文学』1956年9月）に対する多数の意見が寄せられていた。4人のひとりである馬寒氷も『文芸学習』1957年2月号に「一部不真実的作品（真実でない作品）」を書き、党中央のある北京に官僚主義は存在しないと反論した⁽²²⁾。

1957年2月16日昼、中南海頤年堂で文芸思想座談会が開かれ報道・文芸関係者28人が参加した。毛沢東は大いに双方針を堅持するように述べ、馬寒氷の王蒙批判の論文は「教条主義」だと批判した。それと知らぬ馬は再度王蒙批判の論文「香花還是毒草（良い花か毒草か）」を『人民日報』に寄稿した。文芸部は発表の用意をしたが、校閲稿を読んだ毛はこれを批判し、党内幹部に双方針を貫徹する問題を討論させた⁽²³⁾。

2月27日、最高國務会議第11次拡大会議で毛沢東は「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」有名な講話を行った。この中で毛は、左派からの批判の代表として陳其通等の文章を取り上げ、判断が性急過ぎると、不満を述べた⁽²⁴⁾。

上記会議で毛沢東から態度表明を迫られた『人民日報』（鄧拓（『人民日報』総編輯）と袁水拍（同文芸部主任））は、3月から4月にかけて『人民日報』に陳其通等を批判する論文を掲載する。陳遼「対陳其通等同志的‘意見’的意見」（3月1日）は、陳等の意見は一面的であって、「毒草」はあったとしても少数で、文芸の主流は健全に前に向かって発展してゆく良いものだと言った⁽²⁵⁾。3月18日には大家の茅盾が投稿を行い、プチブル思想に対する陳等の反対は肯定するが、プチブル思想に対する批判自体が教条主義になることには反対だと語った⁽²⁶⁾。4月4日には陳等の論文を批判する投稿を編集して掲載し⁽²⁷⁾、4月11日にはこの問題に関する周揚（中共中央宣伝部副部長）とのインタビューを発表している。周揚は、人民に奉仕する立場と社会主義リアリズムの堅持という陳等の主張は正しいが、双方針の成果に関する理解に問

題があると述べる⁽²⁸⁾。いずれも右傾思想への警戒を示しながらも、双方針を支持する観点から陳其通等に反対するという、毛沢東に倣ったような意見であった。

双方針から右派摘発への転換は、中国共産党史における大きな事件となった。1957年5月15日、毛沢東は「事情正在起变化（事態は変わりつつある）」を発表し、一部の人の教条主義は誤っているが、それは党と国家への忠誠心から出たものであって、ただ問題の見方が「左」の一面性に陥っていたにすぎない、むしろ問題は教条主義よりも修正主義の方にあると主張する⁽²⁹⁾。「一部の人」とは陳其通等を指している。6月、毛沢東は「在全国宣伝工作會議上の講話」を修正し、現在は修正主義は教条主義より有害であり、思想戦線の重要な任務は、修正主義に対する批判であると述べる⁽³⁰⁾。

6月以降、陳其通等は批判されなくなった。残念ながら何度か毛に名指しされて批判された馬寒氷は、1957年6月28日に睡眠薬自殺をした。享年41歳であった⁽³¹⁾。陳其通は、自分たちは教条主義的マルクス主義者であったと自己批判し、それを克服して反右派闘争に加わると宣言し⁽³²⁾、それに対して毛沢東は、1958年3月22日の成都會議での講話提綱で、陳其通等は誤っていたが、あえて異なる意見を出した点は評価すべきであると述べた⁽³³⁾。こうして陳其通は安全圏に逃げ延びることができた。

1959年に話劇「万水千山」が映画化される背景には、党の文芸政策の原則である毛沢東の「文芸講話」に従い、「工農兵のために奉仕」する「社会主義リアリズム」を代表する作品を制作しなければならない理由があった。三面紅旗と大躍進政策を追い風に「革命性」を蒸留濾過して出来あがったのが、映画「万水千山」であったと言えよう。

Ⅳ. 長征話劇「万水千山」の修正

1964年7月2日夜、毛沢東が6幕劇「万水千山」を観た。陳其通の本拠である解放軍総政治部文工団話劇団の上演で、陳も陪席した。上演後、毛沢東が舞台上がり、役者たちと握手をすると、会場全体から拍手が響きわたり「毛主

席万歳」と歓呼されたと写真付きで報道された⁽³⁴⁾。このとき毛沢東が、いくつかの場面や人物はいいが、第1方面軍のことしか書いてないのは団結にとってよくないのでこの劇は改善が必要だと述べていたことから、修正版の作成が課題として残された⁽³⁵⁾。

だが1966年から「文化大革命」が始まり、陳其通は文化行政を掌握する江青と意見が合わないなどの事情で批判され監禁されていた。総政治部宣伝部は部所属の作家、馬融、劉一民、錢樹榕、白爾純等を集め、さらに八一電影制片廠文学部の王願堅等が制作班を作り、原作の修正版ではなく、まったく新たに長征を描くことにしたが、作家や役者たち、多くの文芸関係者が批判打倒され、正常な創作や上演活動が中断していた当時の環境では完成に至らなかった⁽³⁶⁾。

林彪事件後の1973年後半、全国で老幹部を「解放」する工作が漸次本格化し、解放軍少将であった陳其通も、監禁から隔離審査へと扱いが変わり、やがて審査の対象から外され職務に復帰することになった。陳其通には話劇「万水千山」の修正版の作成が期待されていた⁽³⁷⁾。

陳其通自身による今回の修正は基本的に1954年の6幕劇に基づき着手した。修正版では、主な登場人物は旧版を踏襲したが、重要な場面や登場人物を変更した他に、多くの追加と削除を行い、原作の6幕7場を10幕15場に修正した。この修正稿は、1975年9月に総政治部文工団話劇団によって上演され、脚本は、1976年7月に人民文学出版社から出版された⁽³⁸⁾。

修正の過程では、毛沢東がしばしば進捗状況を尋ねていた。周恩来もこの劇に関心を持ち自ら直接指示を出していた。にもかかわらず修正作業は難航した。1975年秋、翌年の長征40周年記念事業をめぐり党内部で抗争があり、要職にある「四人組」が「参加経験がないので状況がよくわからない」を口実に長征関係の書類を滞留させ長征記念を妨害していた。『解放軍報』『解放軍文芸』等が一部の長征回憶録を発表し、読者に歓迎されたが、これらを管轄する総政治部主任の張春橋は、これは「政治問題」だと言い総政治部に審査を命じるなど「一時期、長征を宣伝するのは、大罪であることになった」と

いう。こういう雰囲気の中で「万水千山」も当然ながら標的にされ、上演しようとするれば劇場の使用が認められず、新聞雑誌に評論を発表するのも許されなかった。張春橋は「『万水千山』は、老いぼれたちの功績を並べたものだ」と罵倒し、江青は、「この劇には問題がある」と叫び、党内の路線闘争を描いたこの劇を、人民内部の問題ではなく、「敵と我との闘争」を描いた劇だと主張し、劇中の羅副営長を「階級の敵」として書き直させようとしたという⁽³⁹⁾。1975年10月3日、鄧小平は食事中的同僚たちに話劇「万水千山」を話題にし「『万水千山』は虐待されている。上演するいい劇場が見つからないのだ」と語っている⁽⁴⁰⁾。

修正版「万水千山」は2つの党内闘争を描いており、毛沢東路線に反対する王明右傾機会主義と張国濤分裂主義とを厳しく批判している。「四人組」にとっては、林彪事件後に復活してきた党と軍の幹部たちが長征を楯にして「四人組」の極左路線を批判するものと見えたであろう。復活した幹部たちにとっても長征の記憶は精神的な拠り所であった。

1975年11月、「四人組」は鄧小平批判と「右傾翻案風（右からの巻き返し）」に反対する政治運動を起こし、これに「万水千山」を押しやり修正主義の作品にしてしまおうとした。「四人組」の御用執筆者「初瀾」は名指しこそしなかったものの「万水千山」が「革命的様板戯と張り合い」、「工農兵の形象を歪曲した作品である」ことを示唆した⁽⁴¹⁾。「万水千山」が最終的に「解放」されるのは、毛沢東の死と「四人組」逮捕、そして「文革」の終了を待たなければならなかった。

修正版「万水千山」は、彝族地区を抜け、大渡河を強行渡河し、草原を渡るなど旧版の幾つかの精彩ある場面は残した。また旧版の教導員李有国と妹の宣伝隊員李鳳蓮、営長趙志方、副営長羅順成、連長王德強、通信員小周などの主要登場人物も残した。一方、婁山関攻撃、毛児蓋、臘子口攻撃の場面は削除した。また黄団長、周老大娘、藏族の老大爺、老大娘等の人物もなくすことにした。そして第1方面軍の湘江での包圍突破、四渡赤水、遵義会議、雪山越え、涓

河封鎖線の突破、六盤山越え、陝北の紅軍との合流、第2、第4方面軍との合流などを付け加えた。登場人物も第1方面軍以外の各軍の幹部からも登場させた⁽⁴²⁾。修正版の内容については【表3】10幕劇「万水千山」（1975年）の概要」を参照。

修正版の「万水千山」には次のようないくつかの際立った特徴がある。

①歴史の再生という観点からは極めて重要なことであるが、旧版は作者の直接体験が中心となっており、遵義会議後から臘子口攻撃までの「長征」を描いていたが、修正版は第1方面軍の

【表3】10幕劇「万水千山」（1975年）の概要

幕／標題／場	時間	場所	概要
第1幕 蛇江激戦	1934年 秋末冬初	湘黔辺境蛇江渡口“望娘灘”	第1方面軍の先鋒部隊は泰山營と呼ばれる。瑞金を出て2ヵ月、7万余の兵が3万に減少した。原因は王明路線、「左」傾冒険主義の誤りだと、出撃命令を待っている間、兵士たちは、これを厳しく批判する一方、毛沢東の指導の正しさを強調し、毛の「復活」を待ち望んでいる。馬營長が負傷し、王明機会主義路線への憤りを抱いて死ぬ。
第2幕 遵義春暁	1935年 1月	遵義城外“迎春亭”傍	遵義会議が開催されている。李有国、羅順成らは毛沢東の復活を願う。会議が終了、王明機会主義路線が批判され、毛主席が指揮権を獲得した知らせが届く。「万水千山」を越え、北上抗日する方針が明らかになる。背景の暗雲が晴れ、太陽が出てくる。
第3幕 運動殲敵 第1場	1935年 2月	赤水河東岸の山谷峻嶺の間	毛沢東の巧みな用兵を象徴する「四渡赤水」の場面。進軍の方向転換の命令があり、兵士たちは貴陽攻撃かと思っていると、再度方向転換の命令があり遵義城攻撃となり、敵を翻弄する。
同 第2場	前場に続く	遵義城郊	紅軍が遵義を再占領し、捕虜にした国民党軍兵士を釈放するが、強制徴用されていた何伍は紅軍に参加したいと志願する。遵義の周大娘が16才の息子小周を連れてきて紅軍兵士にしてほしいと願い出る。
同 第3場	1935年 5月初	金沙江畔渡口“飛龍渡”	春の陽気の中、紅軍兵士が金沙江を渡ってゆく。舞台は暗転し紅軍を追尾する国民党軍の陣内。動揺し混乱する軍長らの様子が戯画化される。軍長は毛沢東の復活に脅威を覚え悲観する。蒋介石から電報で四川南部への転進命令が来る。だが紅軍はすでに他所へ移動している。
第4幕 彝寨新歌	1935年 5月下旬	西南川康辺境 彝族自治区桃花寨	彝族地区を通過する場面、党の代表と彝族代表が談判している。その間、紅軍と彝族の間で睨み合いが続いている。李有国は一時捕虜にした彝族の小頭領に中共の立場を説明する。また党の民族政策の理解が不十分な羅順成に対し「左」傾の過ちを犯してはならないと根気よく説得する。「文革」の影響からか、党の代表である劉伯承と彝族首領の小葉丹の名が出ない。
第5幕 飛渡天險 第1場	前幕の翌日 午後	大渡河南岸のある渡口	大渡河を渡る場面。急ぎ筏を作る。唯一の船の持ち主である老船夫に、李有国が中共の立場を説明し船を貸してくれるよう説得し、老船夫の協力を取り付ける。
同 第2場	前場同日の 夜	大渡河上	渡河が開始される。筏に乗る李有国が機銃で応戦する。李は胸を撃たれるが、痛みに堪えて兵士を励まし渡河に成功する。
第6幕 雪山風雲 第1場	1935年 6月	岷峨山脈雪線 下的森林中	第1方面軍の泰山營と第4方面軍の錦江營が合流する。藏族とも協力関係が成立する。3者による祝賀会が開かれ、歌を歌い乾杯する。席上、錦江營營長の韓勇から、北上に反対し藏族地区に根拠地をつくらうという第4方面軍内部の不穏な情勢を知る。
同 第2場	1935年 8月	雪山上	雪山越えの場面。暴風や雪崩のある難所を前進する。李有国は傷の悪化を隠し、かつて毛沢東から贈られた指北針を取り出し、これは正しい方向を教えてくれると皆を激励する。

第7幕 草地紅光	前幕から続く	四川省西北高原の湿地帯	兵士たちがお互いを気遣っている。何伍が負傷者の荷物をもってやる。傷の具合を聞かれた李有国は「毛主席の紅軍戦士は、鉄でなければ鋼でできている」と言う。第4方面軍の韓勇が来て、張国濤が毛沢東を批判し南下しようとしていると説き、分裂主義、右傾機会主義を示す証拠の冊子と命令書を李に渡す。李有国は指北針を韓勇に与え、韓勇は時計を李に贈り、外は壊れているが中の機械は動いていると暗喩する。
第8幕 鉄骨鋼筋	前幕からの続き 湿地帯最後の一日	湿地帯の中の柏のある高台	湿地帯を行軍。李有国の病状が悪化する。食糧が尽き革ベルトを雑草と煮て食べる話をする。負傷しても他人の荷物を担ぐ機関銃隊班長が水没。李、趙、羅の3人が毛沢東と井崗山で会ったときを回顧する。傷の悪化で李が昏倒する。組織が李のために葉と馬肉を送ってきて皆が感動する。李有国は死なない。敵の騎兵部隊を殲滅すると李は生きた馬は中央と毛主席に贈り、革命を騎乗させて進ませると言う。
第9幕 誘敵圍殲 第1場	1935年 深秋	六盤山下の山峰間の“衝霄観”側	第1方面軍が陝北の革命根拠地に着く。陝北紅軍の馬越紅、紅25軍の秦為民が迎えに来る。劉志丹が派遣した陝北紅軍秦川營の田望成營長が来る。李有国が、国民党の東北軍と西北軍が蒋介石に不満を持ち、抗日民族統一戦線を支持していることを指摘し、陝北の獅子峰地区での戦闘を指示する。
同 第2場	前場に続く	陝北高原の“獅子峰”	東北軍の将校、沈万成（東北軍砲兵營連長）が紅軍へ投降しようしている。周天沿（東北軍砲兵營長）がそれを制止する。李有国が談判に現れ、ともに日本と闘うべきだと投降を勧める。蒋介石の命令で督戦に来た孫懷昌（情報処長）が李有国と東北軍の下士官に打たれて死ぬ。沈と周は投降を決める。第2、第4方面軍が合流したという知らせが届く。
第10幕 勝利会師	1937年1月	延安宝塔山下、延水そばの広場	第2、第4方面軍が到着、第1方面軍と陝北紅軍と合流する。李有国と韓勇とが再会する。第2方面軍の先鋒營營長、洪剛が登場、毛沢東路線に従って勝利してきたと話す。第25軍の秦為民と陝北軍の田望成も合流し、出合いを祝い延水の水で乾杯する。この大団円の場面での李有国の台詞。「同志諸君。戦友諸君。歴史の経験が我々に教えてくれる。きっぱりと毛主席の革命路線を実行すれば革命は勝利すると。毛主席の革命路線を離れば、革命は挫折し、失敗すると。我々はこの血であがなった真理をしっかりと心に刻みつけた。同志諸君。ここにあるのは延河の水だ。毛主席が飲んだ水だ。我々も一緒に飲もう。我々は団結を堅持し分裂に反対する。毛主席の革命路線の指導の下、全国の抗日を指導する重任を担い、革命の新たな高潮の到来を迎えよう。我々の粟と小銃でもって光り輝く新中国を作りだそう」。皆で「毛主席万歳」を三唱すると『東方紅』の歌が聞こえてくる。続いて『三大規律八項注意』の歌とともに兵士たちが進軍して幕が下りる。

話にとどまらず、第2、第4方面軍、劉志丹の陝北紅軍も登場し、「長征」の行程も、江西離別の場面は省略されたが、湘江戦役から遵義会議を経て三軍合流に至るまでが描かれている。「回想録」のような直接体験の個別的な視点ではなく、長征全体を高所から鳥瞰するような視点から「物語」が構成され、歴史化された長征史となっている。

②「文革」の影響が明確に現れている。その最大の特徴は、毛沢東の神格化である。劇中毛沢東が直接登場することはないが、兵士たちは

絶えず毛沢東への敬愛の念を言葉にし、神秘的にも見える毛の「正しさ」を信じている。以下にいくつかの例を引いておく。

- ・（第1幕の馬營長の臨終の台詞）（ほとんど泣きださんばかりに）毛主席！早く来て紅軍を救ってください。ああ……
- ・（第2幕の羅順成副營長）趙志方たちは警護の任務に行ったからきつと毛主席に会えるんだろう。なんて幸せなんだ。
- ・（第2幕の李有国教導員）（心中の怒りを抑え難く、急いで戦士たちの前に来て）同志

諸君！同志諸君！同志諸君！我々は毛主席に革命を指導してもらいたい！紅軍を統帥してもらいたい！

③党内の路線闘争が中心テーマとなっている。ある評者は「万水千山」は「毛主席の革命路線の勝利の賛歌である」と述べている⁽⁴³⁾。修正版「万水千山」は2つの路線闘争の産物であると言える。前半の「蛇江激戦」「遵義春暁」「運動殲敵」の3幕は、「王明『左』傾機会主義路線」との闘争を描き、後半の「雪山風雲」「草地紅光」「勝利会師」の3幕は、「張国濤右傾機会主義路線」との闘争を描く構成になっている⁽⁴⁴⁾。「文革」自体が「実権派」と「革命派」との路線闘争であるとすれば修正版「万水千山」は、やはり「文革」の影響を極めて濃厚に受けていると言わざるをえない。

④典型的な人物の造型、特に泰山營教導員李有国は、20年前に人気を呼んだ1950年代の話劇と映画の場合もそうであったように、観劇した多くの者を感動させている。

『「万水千山」は偉大な万里の長征の芸術的再現である』とするある評者は、「李有国というこのような典型的な人物の造型は、たいへん有意義」であり、「彼は紅軍政治工作者の典型である。李有国が最も称賛に値するのは、その高度な路線闘争の覚悟である」と見る。なぜなら「長征中の紅軍兵士の、毛主席、党、人民、革命に忠誠な、共通の貴重な品格を表わしており、今日の我が老革命家の全身全霊で人民のために奉仕する革命精神を連想させる。今日の多くの幹部たちも長征中の李有国のような英雄だからだ」と評価しているのは注目に値する⁽⁴⁵⁾。

修正版では、旧作と異なり、李有国は戦死せず、最後まで英雄的活躍を見せている。旧版にしばしば登場し、戦闘指揮のほか、兵士に対し党の政策や立場を指導していた黄团长が修正版では消されてしまい、その役割を李有国が代替している。長征の芸術的再現を狙う「万水千山」の精華は、やはり李有国という人物像に集約されているといえる。

修正版「万水千山」では、役者が地声を用いるのが話劇の「伝統」となっていたのに反し、無線マイクを使用するという斬新な試みをして

いる。それによって単調になりがちな役者の人物造形がより多彩かつ陰影を帯びたものとなり、伴奏音楽を多用するという新しい演出も手伝って、観衆に対しより深い印象を与える効果があったものと考えられる⁽⁴⁶⁾。

むすびにかえて

1975年9月1日、鄧小平（國務院副総理）は陳其通と談話をし、修正版の「万水千山」の講評を行った。構成は変える必要はないが、政治的な問題から考え直す必要がある箇所があるとして鄧小平は次の数点を指摘した。①第2方面軍の書き方が足りないこと、②路線闘争をより明確にすること、③陝北根拠地の到達点と出発点を書くこと、④直羅戦役の目的は東北軍奪取ではなく、陝北への通路確保であったこと、⑤3つの方面軍の合流地点は会寧であり、そのことの政治的意義を際立たせること、⑥毛沢東の軍事思想の最も輝かしい一頁は四渡赤水であることなどを指摘した⁽⁴⁷⁾。

その後、修正された話劇「万水千山」は、中共中央政治局、全人代常委会、國務院、中央軍事委員会が指導する集団審査を通過し、1975年10月の紅軍長征勝利40周年の記念活動期間に正式に上演された⁽⁴⁸⁾。

6幕劇「万水千山」が1959年に映画化されたように、10幕劇「万水千山」も「文革」終了後の1977年に映画化された。陳其通が再度脚本を担当し、八一電影制片廠の嚴寄洲が監督を担当した。旧作からすでに20年近くが経過しており配役も一新されたが、李有国役はかつて趙志方を演じ「万水千山」を熟知している黄凱が担当した。

1979年2月14日、文化部党組は中央宣伝部に対し、上映を復活してよい映画、上映禁止とする映画、時宜にあわない映画、暫時上映を延期する映画について報告を行っている。上映復活映画の筆頭に「万水千山」が挙げられた⁽⁴⁹⁾。

紅軍長征という中共の過去の歴史は、1940年代から1950年代にかけて、その歴史の一部を描写する「回想録」と政治的文学である「物語」が人々の想像力を刺激してきた。そしてそれ以上に、話劇と映画は、視覚と聴覚に訴える手法

でもって人々の脳中に長征に関する強烈なイメージを注入したであろう。

小さな事例であるが、「万水千山」で使用した兵服は、デザインも色も実際のものとは違っていた。舞台上の中国労農紅軍の兵服はすべて淡い灰色であったが、実際は色調のふぞろいな灰色であった。大多数の人は1935年当時の紅軍の服装など見たこともなく、話劇で使われた兵服が標準的な紅軍のそれだと思われてきたにすぎず、「博物館で展示される紅軍の服装も話劇『万水千山』の服装をコピーしたものである⁽⁵⁰⁾」。

李有国など紅軍を代表する英雄の人物像も、「万水千山」を通じて真実らしさの衣裳を纏い、伝承されてきた可能性を疑う必要があるのではないだろうか。1950年代に話劇「万水千山」の李有国役を演じた藍馬の場合、6年間軍隊で暮らした経験があったにもかかわらず、「紅軍二万五千里の故事を読んだことはあるが具体的な情況は知らなかった」。そのため陳其通は、紅軍の物語、革命歴史博物館の展示、中国共産党史の学習、夜間行軍・夜間戦闘の演習などで役者たちを啓蒙し教育する必要があったようである⁽⁵¹⁾。

長征勝利60周年記念を迎えた1996年の中国では「長征精神」が盛んに称揚された。それは江沢民政権のみならず、次の胡錦濤政権にも引き継がれてきた⁽⁵²⁾。ある論者は「長征精神」の内容を次の以下の4点に概括してみせた。すなわち、①革命の理論と事業に対する無比の忠誠、革命が必ず成功すると信じる信念、②困難と犠牲を畏れず、勇気をもって勝利し、楽観に満ちて勇猛邁進する英雄的気概、③大局を考え、規律を厳守し、緊密に団結する高尚な品德、④人民大衆と連携し、誠心誠意人民に奉仕して刻苦奮闘する崇高な思想、である⁽⁵³⁾。いずれも劇中の典型的な英雄像と合致する特徴を具えていると言わざるをえない。

本稿で検討したような、話劇、そして映画において、観衆に感動を与えるという「芸術的な観点」から造型された紅軍兵士像、そしてその背景にはその時代特有の政治的背景を有する中で造型された「長征」イメージが、「歴史の再生」と等質視され、そのまま「過去の記憶」として保存され、伝承され、現在の中国共産党の

正統性根拠を構成する「過去の栄光の歴史」となっていることについて、改めて検証する必要があるであろう。

【注】

- (1) 陳剛「革命英雄の形象永遠活在舞台上」『読書』1959年23期、24頁。
- (2) 劉孝文、梁思睿編纂『1949-1984中国上演話劇劇目総覧』巴蜀書社、2002年1月、858～866頁。
- (3) 陳剛、前掲、69頁。
- (4) 中共が長征の経験を今後も引照されるべき「精神」として称揚していることについては、拙稿『「長征精神」論の現代的位相』『目白大学総合科学研究』第6号、2009年3月、を参照。また、長征に関する「物語」が、1940年代において、「歴史」へと転轍される経緯については、拙稿『「長征物語」の形成と背景—長征史研究の現在とその問題—』『目白大学人文科学研究』第8号、2011年3月、を参照。
- (5) 「後記」1954年9月4日、陳其通『萬水千山（六幕劇）』人民文学出版社、1955年2月、215頁。陳其通は、中華人民共和国成立後は、中国人民解放軍総政治部文化部文芸処副処長兼総政治部文工団団長、文化部副部長、総政治部宣伝部副部長兼解放軍芸術学院副院長、総政治部文化部副部長を歴任。1961年、少将に昇進。
- (6) 「後記」、同上、216～217頁。
- (7) 「後記」、同上、216～217頁。
- (8) 「後記」、同上、216～217頁。
- (9) 長征物語を構成する類型については、拙稿『「長征物語」の形成と背景—長征史研究の現在とその問題—』前掲、を参照。
- (10) 「後記」、前掲、220頁。
- (11) 「後記」、同上、222頁。
- (12) 「一九五四年本刊刊載的劇本在各地上演簡況」『劇本』1955年2月。
- (13) 余級秋「巡迴演出中的几点体会」『戲劇報』1958年09期、8頁。
- (14) 張庚「談“万水千山”里的人物」『戲劇報』1954年11期、32～34頁。李有国役の藍馬については、桑夫「演員藍馬和他的角色創造」『戲劇報』1956年3期、および藍馬「努力塑造長征英雄的崇高形象—談我是怎麼扮演“万水千山”中的李有国的」『戲劇報』1956年4期を参照。
- (15) 鄭邦玉主編『解放軍戲劇史』中国戲劇出版社、

- 2004年3月、88頁。
- (16) 程樹安主編『中国電影名片鑑賞辭典』長征出版社、1997年7月、208頁。
- (17) 鄭邦玉主編『解放軍戲劇史』前掲、90頁。
- (18) 陳其通、陳亞丁、馬寒冰、魯勒「我們對目前文芸工作的几点意見」『人民日報』1957年1月7日。
- (19) 陳其通、陳亞丁、馬寒冰、魯勒、同上。
- (20) 錢江「毛沢東和陳其通等人的文章風波」『世紀』2009年3期、14頁。錢江は『人民日報』海外版副総編輯。
- (21) 毛沢東「在宣伝會議上講話（提綱）」『建国以来毛沢東文稿』第6冊、中央文献出版社、1992年、376頁。錢江、同上、15頁。
- (22) 錢江、同上、15頁。
- (23) 錢江、同上、15頁。
- (24) 毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」マックファーサー他、徳田紀之、小山三郎、鏡屋一訳『毛沢東の秘められた講話上』岩波書店、1992年、92～93頁。錢江、同上、15頁。
- (25) 陳遼「対陳其通等同志の‘意見’の意見」『人民日報』3月1日。「対陳其通等“我們對目前文芸工作的几点意見”一文の評論」『讀者月報』1957年4期。
- (26) 「貫徹“百花齊放、百家爭鳴”、反对教条主義和小資産階級思想」『人民日報』3月18日。
- (27) 「陳其通等“我們對目前文芸工作的几点意見”發表以後」『人民日報』1957年4月4日。
- (28) 「就“百花齊放、百家爭鳴”問題 周揚同志答文匯報記者問」『人民日報』1957年4月11日。
- (29) 毛沢東「事情正在起变化」『建国以来毛沢東文稿』第7冊、中央文件出版社、1992年、469頁。
- (30) 毛沢東「在中国共產党全国宣伝工作會議上的变化」『建国以来毛沢東文稿』第6冊、中央文件出版社、1992年、394頁。1957年3月14日の講話原稿は当時發表されず、修正が施されて1964年6月刊行の『毛沢東著作選讀』甲種本で發表された（後に1977年刊行の『毛沢東選集』第5巻に収録された）。錢江、前掲、17頁。
- (31) 錢江、同上、17頁。
- (32) 陳其通、陳亞丁「克服教条主義、投入反右派鬭爭」『人民日報』1957年8月21日。錢江、同上、17頁。
- (33) 毛沢東「在成都會議上的講話提綱」『建国以来毛沢東文稿』第7冊、中央文件出版社、1992年、116頁。
- (34) 新華社「毛主席同其他領導人看話劇《万水千山》京劇《智取威虎山》《蘆蕩火種》」『戲劇報』1964年7期、2頁。
- (35) 鄭邦玉主編、前掲、327頁。中共中央文獻研究室編『鄧小平年譜 1995-1997（上）』中央文獻出版社、2004年、89頁、脚注〔1〕を参照。
- (36) 鄭邦玉主編、同上、327頁。
- (37) 鄭邦玉主編、同上、327頁。
- (38) 鄭邦玉主編、同上、327頁。陳其通編劇『万水千山（十幕話劇）』1975年9月中国人民解放军総政治部話劇団演出本』人民文学出版社、1976年7月。および陳其通「万水千山（十幕話劇）1976年版本」『陳其通作品選』解放軍文芸出版社、2008年7月、所収。後者は近年の刊行物であるが校訂が十分であるとはいえない。
- (39) 穆静「“四人幫”是扼殺《万水千山》的刽子手」『人民文学』1976年9期、89頁。
- (40) 中共中央文獻研究室編『鄧小平年譜 1995-1997（上）』前掲、110頁。
- (41) 初瀾「堅持文芸革命、反擊右傾翻案風」『人民日報』1976年3月4日（原裁は『紅旗』1976年3期）。穆静、前掲、90頁。
- (42) 鄭邦玉主編、前掲、327頁。
- (43) 王臻中「長征光芒照万代—贊話劇《万水千山》」南京師範大學報（社会科学版）、1977年1期、37頁。
- (44) 任基平、今朝「毛主席革命路線的壯麗頌歌—喜看話劇《万水千山》」『人民戲劇』1976年6期、94頁。
- (45) 岳文志、陳建国、東新露「評十幕話劇《万水千山》」『思想戰線』1977年3期、65～66頁。
- (46) 陳嘉陡「陳其通的戲劇藝術特点（代序）」『陳其通作品選』解放軍文芸出版社、2008年7月、5頁。陳嘉陡は、王徳強役の俳優である。
- (47) 中共中央文獻研究室編『鄧小平年譜 1995-1997（上）』前掲、89頁。
- (48) 中共中央文獻研究室編『鄧小平年譜 1995-1997（上）』同上、90頁。
- (49) 「文化部党組關於《万水千山》等五十一部影片處理向中央宣伝部の報告」吳迪編『中国電影研究資料：1949-1979』文化芸術出版社、2006年、542頁。
- (50) 陳嘉陡、前掲、5頁。
- (51) 藍馬「努力塑造長征英雄的崇高形象—談我是怎麼扮演“万水千山”中的李有国的」『戲劇報』1956年4期、10頁。
- (52) 拙稿「『長征精神』論の現代的位相」前掲、を参照。
- (53) 李小三主編『中国共產党人精神研究』（中央文件出版社、2008年3月）210～212頁。